

平成29年度 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 東朽網 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成29年4月18日（火）に、6年生を対象として、「教科（国語、算数）に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。なお、本校の6年生は、単学級ですので、個人が特定されないように公表の方法については、配慮しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査（国語、算数）

主として「知識」に関する問題（A）	主として「活用」に関する問題（B）
<ul style="list-style-type: none">・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容・実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能	<ul style="list-style-type: none">・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

- (2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

※本校の6年生は、単学級ですので、個人が特定されないように公表の方法については、配慮しています。

3. 教科に関する調査結果の概要

(1) 全国・本市の学力調査（国語A・B，算数A・B）の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	11.0	74	5.1	57	11.6	77	4.9	44
全国	11.2	75	5.2	58	11.8	79	5.1	46

(2) 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	<ul style="list-style-type: none"> ・全体的には全国平均正答率をやや上回っていた。特に、言語知識理解の基礎はできていた。また、読む力を問う問題などは、全国平均正答率を大きく上回っていた。 ・書く力や話す、聞く力を問う問題に課題があり、今後、重点的に取り組む必要がある。
	よくできた問題	<ul style="list-style-type: none"> ・俳句の情景を捉える問題や、ことわざの意味を理解して自分の表現に用いるなどの問題は、正答率が高い。
	努力が必要な問題	<ul style="list-style-type: none"> ・手紙の構成を理解し、後付けを書く問題は正答率が低く、課題が明らかになった。

国語B	全体的な傾向や特徴など	<ul style="list-style-type: none"> ・全体的には全国平均正答率をやや上回っていた。特に、目的や意図に応じて書く問題や、読む力を問う問題などは、全国平均正答率をやや上回っていた。
	よくできた問題	<ul style="list-style-type: none"> ・全体的には全国平均正答率をやや上回っていた。「目的や意図に応じて引用して書く。」や「登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえる。」などの問題は、全国平均正答率を大きく上回っていた。
	努力が必要な問題	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分の考えを広げたり深めたりするための発言の意図を捉える。」や「具体的な叙述を基に理由を明確にして、自分の考えをまとめる。」などの問題については課題が明らかになった。

算数A	全体的な傾向や特徴など	<ul style="list-style-type: none"> ・全国平均正答率をやや下回っていたが、どの観点でも、全国平均正答率に近い正答率になっていた。特に図形領域は、全国平均正答率を大きく上回っていた。
	よくできた問題	<ul style="list-style-type: none"> ・乗法で表す二つの数量関係の問題や乗法の性質を理解した小数の計算は、全国正答率を大きく上回っていた。
	努力が必要な問題	<ul style="list-style-type: none"> ・混合した整数と小数の計算では、順序を考えて計算する技能が不足しており、基礎的な計算力を付ける必要がある。

算数B	全体的な傾向や特徴など	<ul style="list-style-type: none"> ・全国平均正答率をやや下回っていたが、どの観点でも、全国平均を超える正答率か、それに近い正答率になっていた。
	よくできた問題	<ul style="list-style-type: none"> ・数を変更しても同じ関係が成り立つ計算を、図に表現する問題は、全国正答率を大きく上回っていた。
	努力が必要な問題	<ul style="list-style-type: none"> ・資料からその求め方と答えを記述する科学的な考え方の問題は、課題が明らかになった。

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の

質問紙調査の結果分析

- ・生活習慣については、5年生の時よりも、就寝時間が遅くなっている児童が増えている。その原因として、テレビ・ゲーム・スマホなどへの接触時間の増加が考えられる。
- ・家庭での学習時間は、5年生の時と比べると増えている。年度当初からの声かけと計画的な取組が影響しているものと考えられる。
- ・話し合い活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすること、また、自分の考えを人に説明したり、文章に書いたりすることに苦手意識をもっている児童が少なからずいる。積極的に話し合い活動に取り組む必要がある。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組（全校で・学年で・学級で）

- ◎学力向上推進教員のモデル授業を基に、全職員で研修をおこない、自らの授業をふり返ることで、授業力のさらなる向上を図る。
- ◎若年教員を中心に、「授業改善ハンドブック」「授業改善シート」を活用し、算数科を中心に、日々の授業を5つのポイントから検証することにより、授業力の向上を図る。
- ◎「話す」「聞く」「書く」ことの習慣化 ・一分間スピーチの実施や、児童相互の意見の交流や、考えを文章化する学習の場を設定する。

② 家庭生活習慣等に関する取組

- ◎宿題のスタンダード化 ・「家庭学習のススメ」を活用して、家庭学習時間（低学年20～30分、中学年30～40分、高学年50～60分）を設定する。
 - ・「家庭学習チャレンジブック」を活用して、家庭と連携しながら、家庭学習を進める。
 - ・長期休業日中の宿題に、過去問題やアシストシートを活用する。
 - ・高学年を中心に、自主学習ノートづくり（国語科や算数科を中心に、授業内容のふり返りや、発展的な学習）に取り組む。